

山島で、東に行くほど古い傾向があり、ハワイ諸島の場合と同様にホットスポットと考えられている。火山の成長過程もハワイ諸島と似ており、よく対比させられる。島は伊豆半島程度の大きさで、南半分は気候上の関係で砂漠化している。したがって、巡検の大部分は露出の良い南側であった。

グラン・カナリー島は約1400万年前にすでに、海面上に姿を現し、アルカリ玄武岩による盾状火山期を迎えていた。そして、その後現在に至るまでにカルデラ形成を含む2回の主活動期（9割以上アルカリ岩）を経ている。この間、一枚数メートルの溶結凝灰岩が合計で20以上ある。長期にわたるこれらの活動は、すべて島の中央で起

こっているのであるが、この間にも直径30kmのこの島はプレートに乗って300km程も流されていることになる。マグクの上昇道が東に傾いたと解釈されているが、あらためて、ここグラン・カナリー火山の活動規模の雄大さに驚く、

それにしても、砂漠地帯の保存の良さはすごい。日本ではどうも考えられない。ある日本人火山地質研究者が言った、「こんなにいい露頭を見ると、日本での苦勞が馬鹿みたいに思える」そんなことはないでしょうと思いつつも、そのスケールの大きさと明確さは、火山に対するイメージをまた一つ塗りかえるに十分なインパクトであった（環境地質部 風早康平）。

中尾通商産業大臣地質調査所来訪

中尾通商産業大臣が今年6月27日に、工業技術院筑波研究センター内の4研究所を視察された。筑波の研究所へは、これまでフランスのミッテラン大統領、英国のサッチャー前首相をはじめとして、各国の首脳陣が訪れている。大臣は就任後できるだけ早い時期に訪問したい意向であったようだが、多忙中であって実現が遅れたとのことである。この視察の最後に地質調査所を訪問されたので、その様子をお伝えする。なお、この時には6月14日に地質調査所長から工業技術院長になられた石原院長が同行された。

大臣の地質調査所御視察の概要は次のとおりであった。

6月27日午後2時20分到着

1. 地質調査所概要説明
2. 雲仙岳噴火について（地調の対応を含む）説明
3. 日本列島の地質（山梨県の地質を中心に）説明
4. 太平洋海底地形の紹介と珊瑚礁を用いた二酸化炭素固定の研究紹介
5. 日本周辺の震源分布と規模について説明
6. 鉱物・岩石・化石展示の紹介

午後3時10分～3時40分 記者会見

以上、すべて地質標本館にて行われた。説明は小川所長が行い、佐藤次長と神谷標本館長が補足説明にあたった。大臣は各説明に真剣に聞き入っておられた。特に、地質調査所が100年以上の歴史をもち、世界各国からた

くさんの研究者が来訪し、共同研究を行っているという点に大きな興味をもたれた様子であった。

予定時間が超過気味に進行し、周りの担当者にとっては心が落ちつかない中での地質標本館の紹介であったが、無事に予定時間内におわることができた。大臣の来訪をはじめとして、地質調査所及び地質標本館を見学される方は多い。その事前の準備や裏方で細かい注意を払うことも多いが、とどろりなく進行し関係者も一安心したところである（企画室）。



写真：標本館一階ホールに特別展示中の雲仙岳噴火について、佐藤次長の説明に聞き入る中尾大臣。前列右から佐藤次長、中尾大臣、石原院長、小川所長。